

中学生の英文構造習得プロセスに関する事例研究 — 英文日記にあらわれた誤りの分析を中心に —

島根大学教育学部 築道 和明

1 はじめに

小篠他(1983)は、誤答分析研究を中心とした中間言語研究が「言語普遍性の追求」に偏ることを警告し、中間言語研究の目指すべき方向の1つとして、具体的、個別的なデータを集め、蓄積することの必要性を次のように提案している。

誤答分析を基本にした中間言語研究が、応用言語学の研究分野として、言語教育との緊密な関係を保証するためには、抽象化の方向だけでなく、個別化の方向にも十分なエネルギーが注がなければならないであろう。即ち、わが国をはじめ多くの国の外国語としての英語学習場面、インドなどの第2言語としての英語学習場面、などの個別の第2言語習得場面における地道な誤答分析研究の積み重ねが必要である。(小篠他 1983:190~191)

また、金谷他(1994)は、わが国の英語教育の理想像を求める上で学習者の中間言語データを蓄積することが前提条件になることを以下のように述べている。

すべての文法項目において日本の中学生の interlanguage の習得の過程を分析して、それに合わせた指導・評価ができればそれが理想的ではある(その研究はぜひ進める必要がある)。現状では interlanguage のデータはまだ不足していて、中学の英語教育を根本から大はばに改革するには十分ではない。(金谷他 1994:44)

本研究は、統語レベルでの誤答分析という観点から、小篠らの主張する「個別化」を志向した一つの試みであり、また、金谷らの指摘する長期的、継続的な観点から、学習者の中間言語の変容の姿を把握しようとする試みでもある。

2 本研究の目的

本研究では、日本人中学生が基本的な英文構造をどのようなプロセスで習得していくかを事例研究に基づいて考察し、中間言語研究への基礎データを提供することをその目的とする。ここで言う「基本的な英文構造」とは、具体的には英語の語順と時制とを意味する。

3 分析のためのデータ¹⁾

一定期間にわたって学習者を観察し、英語習得のプロセスを把握しようとする上でネックとなるのは、データをいかにして集めるかという点である。すなわち、中学校や高等学校で直接指導

にあたる教員の協力なくしては、このような研究を進めることは不可能であると言える。

また、たとえ研究協力者を得たとしても、具体的なデータ収集においては研究する側の関心、都合を第一に優先することは難しい。日常の教育活動にできるだけ支障をきたさない範囲での協力をお願いするということになる。

longitudinalな観点からのデータ収集に伴うこのような困難性を考えて、本研究では 島根県内の公立中学校3年生の女子生徒をケーススタディの対象として選ぶことにした。具体的には、彼女が1993年4月から1994年3月までの間に記した英文日記(総計97回)をもとに、英文構造をいかなるプロセスを経て習得していくかに関して考察を加えることにした。²⁾

4 分析の観点

本研究では、データ収集に先だって分析の観点を設定するという方法はとらず、入手できたデータをみて、分析のための観点として以下の2点を設定した。

(1) 語順の習得

(2) 一般動詞の過去時制の習得

ここで言う語順とは、{誰、何が} → {どうする} → {誰、何を} → {どの様に} → {どこで} → {いつ} → {何のために} というマクロなレベルでの単語のつながりを意味している。従って、例えば関係節や従属節などの語順は分析の対象外にしている。また、be動詞や There is, there are で始まる英文構造もここでは分析の対象とはしない。

一般動詞の過去時制を分析の一つの観点として設定したのは、日記というデータの性格上、当然予想されることではあるが、過去時制の出現頻度が他の時制と比べると高いという理由からである。

より具体的には、以下のような手順で分析を試みた。

(1) まず、月毎に日記に使用されている英文総数を数え、次にそれらのうちで語順の誤りを含む英文の比率を算出する。³⁾ その上で語順習得の時期を同定する。また、語順の誤りに関して頻繁に生ずるものはどの様なものか、それは時期によって変化するか否かに関しても併せて考察する。

(2) 一般動詞の過去形の使用に関する誤りとしては、どの様な誤りが多いか、また、時期により誤りのタイプに変化がみられるか否かを考察する。

5 分析結果

5.1 語順習得のプロセス

(1) 長期的な視点からみた変化

まず、日記開始直後の英文と約1年後の英文とを次に示す。なお、()内の数字は日記が記された「月、日、年」を示す。

A test is End. English and Society is the most better. But a mistake a lot of. I'm very happy now.
Next test fight! (5/18/93)

↓

I always think you are so busy that you can't play with your children. So I hope you enjoy playing with your family. You are always busyed by us. (2/24/94)

1993年の5月の段階では、この例からも明らかなように日本文の語順に英単語をそのままあてはめて表現しようとする誤りが多いことがわかる。この段階で、正しい語順による英文も出現してはいるが、その多くは、主語が1人称で、like, play, have, amなどの動詞を用いた場合に限定されており、英語の基本構造に対する意識は未発達の段階であると判断される。

一方、約9ヶ月後の1994年2月の日記では、語順からみた誤りは皆無に近い。

(2) 語順の誤りを含む英文出現率

次に、語順の誤りを含む英文が日記に使用されている英文全体の中でどの程度の割合で表れているかを月毎に集計してみた。なお、形容詞節や副詞節を含む複文は使用時期が12月以降に集中しており、且つ、あまり多くは用いられていないので、それらの中に誤りがあったとしても、ここでは誤りの中に含めていない。従って、表1のパーセンテージは、単文と名詞節にあらわれた語順の誤りの比率である。

表1から、この中学生の場合、語順がほぼ習得できたのは日記を開始して8ヶ月あとの12月頃であると推定される。

マクロなレベルでの英語の語順は12月頃に身に付いたと判断されるが、例文(6)(7)(9)の下線部が示しているように、英語の文構造を構成する個別の要素、例えば、{どこ}{いつ}{誰を}、の中での語順に関しては12月以降も誤りが出現している。すなわち英文の全体構造には注意が向いているが、英文の個々の構成要素内の単語の並び方までには意識が働いていないということの意味していると思われる。

月	4	5	9	10	11	12	1	2	3
日記回数 ⁴⁾	5	2	2	8	18	14	13	26	5
使用英文総数	42	11	18	72	124	115	87	310	129
語順エラー率	47.6	54.5	55.6	41.6	33.9	13.0	9.2	4.8	0

表1 語順エラーを含む英文出現率

- 1) Today studied English. (4/22/93)
- 2) I no what's a strong point no very much. (4/30/93)
- 3) Me is not turn good an answer after all. (9/28/93)
- 4) We diged sweets with hoe in field today. (10/29/93)
- 5) My father and my sister was go out in the Nonami junior high school gym by car at about eight to practice volleyball. (11/6/93)
- 6) I have just finished my about election work in fifth and sixth periods. (12/17/93)

- 7) I heard there are many with cold students in the seventh grade. (2/1/94)
 8) I slept in the living room as soon as I got home because I was tired. (2/4/94)
 9) And I will try as hard as I can to she understand my story. (2/9/94)
 10) I went to my grandmother's house with my mother and my sister as soon as I went home from school to see the uncle which went home from Osaka. (2/19/94)

(3) 語順習得を示唆する2つの指標

次に、語順の誤りを含んだ英文を月毎に細かくみていくと語順がほぼ定着したと考えられる12月以前とそれ以降に関して、特に顕著な違いがみられるパターンが明らかになった。それは、"I want ..." と "I think..." というパターンである。

それぞれの場合で11月までとそれ以降での出現回数、並びにその中で語順が正しく使われている比率を表したのが表2、および表3である。このことは、つまり、これら2つのパターンの文構造が英語の基本的な語順習得の時期とほぼ一致しているということを意味していると考えられる。

	使用回数	正使用	正使用率
4～11月	14	2	14.3%
12～3月	40	36	90.0%

表2 "I want ~" の時期による変容

	使用回数	正使用	正使用率
4～11月	20	2	10.0%
12～3月	17	15	88.2%

表3 "I think ~" の時期による変容

- 11) I want tall very much. (4/30/93)
 12) I want to English very well. (11/2/93)
 13) I wanted to Kendo than Judo. (11/10/93)
 14) I not want rest day, because I must a lot study. (11/12/93)
 15) I want to more a lot club. (11/25/93)
 16) I think children such a little what harding. (10/3/93)
 17) And I think too long to one day. (11/1/93)
 18) I think to no wash the shell for a good while. (11/3/93)
 19) I thought good this tests end. (11/16/93)

20) I thought me, too. (11/24/93)

(4) 語順習得の例外現象

一方、英語の基本的な語順が習得されたのちでも出現する誤りとしては、例文(21)～(27)に挙げたように日本文のトピックを英文の主語に結びつけて be 動詞で結ぶというパターンがある。このパターンは、1月以降も数こそ少ないが出現している。こうした誤りは、吉見(1983)や松岡(1994)で指摘されているように大学生レベルの学習者にもみられるものであり、入門期レベルの中学生の場合、日本文の表層構造には表れない主語を補って英文を書くという作業はより一層困難であるということを示唆している。

21) Sweeping is fearful from tomorrow. (5/11/93)

22) And after noon was We worked to school. (10/30/94)

23) It was we announce shape. (11/5/93)

24) Reservation was a lot. (12/29/93)

25) Now is very cold, so I wash Shell and he will be in sick bed. (1/30/94)

26) Tonight is a party. (2/5/94)

27) The paper was next tests wide area. (2/18/94)

[→吉見(1987),松岡(1994),Niimura(1990)参照]

5.2 過去時制の習得

(1) 典型的な誤り

一般動詞の過去時制に関する典型的な誤りは、以下の2つの例にあるように「be 動詞の過去形プラス動詞」という形である。

28) I was think I has to be practice. (4/17/93)

29) Class was end. (9/29/93)

(2) 主語の人称による過去時制の習得時期のずれ

今回分析したのは日記であるから、2人称で且つ過去時制という形は、ほとんどあらわれていない。大半が1人称と3人称である。

1人称が主語にきた場合、上でみたような be 動詞を過去時制の tense marker として使用した誤りは、3例のみであった。この学習者の場合、主語が1人称の場合は動詞を過去形にするというルールが早い段階で身につけていたものと考えられる。⁵⁾

一方、主語が3人称の場合、例文(30)以下に挙げているように11月の段階でも be 動詞と同時に使用するケースがみられた。3人称の場合、過去時制が習得されたのは12月以降と判断される。すなわち、一般動詞の過去時制の習得に関して、この中学生の場合、主語が1人称の場合が先に習得され、3人称の過去時制はそれから若干遅れて習得されたと言える。

30) Children were comes force very much. (10/3/94)

31) I and Nami was arrive i school about eight fifteenth. (10/30/93)

32) Shell was very behave. (11/3/93)

- 33) My father and my sister was go out. (11/6/93)
 34) My father was still didn't get to our home. And he was got to our home for a while. (11/10/93)
 35) Music club was did Karaoke. (11/25/93)
 36) My mother cooked Yuzu dishes for me. To I become well. My mother put Yuzu in the bathroom, too. (12/11/93)
 37) The man I watched on TV was look like very kind. (12/23/93)
 38) Mr. Ogawa, Mrs. Ogawa and my parents sang some musics together. (12/29/93)

6 考察と課題

(1) 今回分析の対象とした中学生の場合、基本的な英語の語順が定着するまでに8ヶ月近くの時間が必要であった。では、中学1年の入門期より英語の語順を重点的に指導した場合、この期間は短縮できるのか。⁶⁾

(2) 日本文の Topic をそのまま英文の主語に置き換える訳りは、基本的な語順が定着した後でもあらわれた。これは、指導により克服することが困難であるということを示唆しているのか、あるいは何らかの指導により克服することが可能なのか。

(3) 一般動詞の過去時制の習得に関しては、主語が1人称の場合と3人称の場合で時差がみられたが、この点は他の学習者にも一般化できるか否か。

注

1) 本研究のためのデータは、鳥根県鳥根町立野波中学校の田尻悟郎先生より提供いただいた。ここに記して感謝申し上げる。

2) 田尻先生は、1993年4月に現任校に赴任され、今回分析の対象とした中学生を1993年の4月から1994年3月までの1年間、指導された。また、赴任当初より、生徒の家庭学習の内容はそれぞれの生徒自身が決定して行うという学習方法を採用されている。従って、この生徒の場合も英文日記は教師からの強制ではなく、自らの判断で書き始めたものである。

尚、田尻先生からは、この生徒の他に6名の学習者の1年間にわたる家庭学習用のノートをデータとして提供していただいたが、今回は(1)日記の記録回数が多いこと、(2)4月時点と3月時点とを比べて実容が著しいこと、の2点から当該の女子生徒のノートを取り上げることにした。

3) 形容詞節、副詞節を含む複文は除外している。

4) 6月から8月にかけて日記の記録が欠けている。これは、日記を書くという応用練習よりも基本的な文をたくさん覚えるべきであるという担当教師の助言に従ったためである。6月から8月にかけては基本文の練習や教科書本文を書き移す練習がノートにはみられる。

5) 1人称に限定して言えば、11月23日には次のような英文が見受けられる。

I have studied English since a little while ago. I will study a lot of tonight. Because I didn't study little these days.

6) 英語の基本的な語順を習得することができた要因は何かに関して本研究では論じていない。しかし、語順と時制を重点的に指導した教師の影響が大きいものと推測される。田尻氏によれば、1993年4月入学の中学1年生は、語順を重点的に学習した結果、中学2年の現在、語順の訳りはほとんど出現していないということである。実際、次のような英文日記のある中学2年生の女子生徒が書いている。(1994年11月の時点)

We had a road race the tird class today. I wish it was rainy. But it was sunny when we ran. I didn't want to run this season. Because the wind is very cold from the sea this season. I saw not handsome man when I was running. The man had the gunte on his hand and He was wearing green training wear. The man was lazy road race last month, so I think he ran hard. I was the first road race today. What is your order?

引用・参考文献

- Dulay, H., M. Burt & S. Krashen (1982) *Language Two*. Oxford Univ. Press.
- Ellis, R. (1985) *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford Univ. Press.
- (1994) *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford Univ. Press.
- 金谷憲 (編著) (1984) 『定着重視の英語テスト法—長期的視野に立った中学校英語評価』河原社
- Lightbown, P. (1985) "Great Expectations: Second-Language Acquisition Research and Classroom Teaching," *Applied Linguistics*, 6, 2, 173-189.
- 松岡博信 (1994) 「日本人英語学習者の自由英作文に見られる Thematicity Constraint について— Topic Prominence による干渉に焦点をあてて」『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 23, 125-132
- Niimura, T. (1990) "There IS a Topic-Marker in the English of a Native Japanese Speaker: Discourse Analysis of English Interlanguage," in Shimaoka, T. & Y. Yano (eds.) *Studies in Applied Linguistics*. (1990: 39-45) Liber Press.
- 小篠敏明 (編) (1983) 『英語の誤答分析』大修館書店
- Rutherford, W.E. (1983) "Language Typology and Language Transfer," in Gass, S. L. Selinker (eds.) *Language Transfer in Language Learning*. (358-370) Newbury House Publishers, Inc.
- 佐藤郁哉 (1992) 『フィールドワーク 書を持って街へ出よう』新曜社
- SLA 研究会 (編) (1994) 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店
- Tarone, E. (1983) "On the Variability of Interlanguage Systems," *Applied Linguistics*, 4, 2, 142-163.
- 吉見富美子 (1987) 「自由英作文の指導—誤りの原因・理由をさぐる 1」『英語教育』(大修館書店) 9月号 83-85